

中・日語対照研究と日本語教育

徐 一 平

一、はじめに

研究成果を如何に教育の方と結びつけるのは大きな課題である。両者が平行してほとんど無関係のように存在しているのが中国の日本語研究と日本語教育の現状かもしれない。でも、最近になってそのようなことに注目し、この両者の結びつきを試みる動きが出始めている。例えば、ずっと中国の日本語教育の現場を支配している学校文法の体系を変えようとする努力などはその現われではないかと思う。もちろん、これはそんなに簡単なことではない。その体系を変えるよりも、もっと基本的な問題もあるのではないかと思う。

二、言語主体の問題

初級日本語教科書を見て、まず気になる点の一つは、「私」を文中に明示することによって不自然さが生じる問題である。

日本語教科書を見てみると、その多くが「私は/あなたは/彼は～です」と、人称代名詞が義務的であるかのように提示されており、日本語では「私」をはじめ人称代名詞が言語化されにくい事実注目した教科書は、ごく稀である。そのような教育を受けた中国人学生が会話すると、以下のようなやり取りになるのが随所に見られる。

中国人学生による会話例：

- a. もしもし、わたしはAです。
- b. あ、Aさん。あなたはもう駅に着きましたか。
 - a. いいえ、まだです。すみませんが私は15分ぐらい遅れます。
 - b. そうですか。私は分かりました。駅についたらまた電話してください。
 - a. はい、私は分かりました。ありがとうございます。

以上の下線の部分の言語主体は、おそらく自然な日本語としては、いずれも言語化されないのが普通であろう。

それから、最近中国の対外漢語教育の発展にしたがって、中国語普及を目的とする『漢語900句』（中国外語教学与研究出版社、日本語版『コミュニケーション

中国語900』）が出版された。このテキストに選ばれた900の短文を調べてみると、「我」と「我们」が言語化されている短文は190文もあり（そのうち「咱们」の4文が含まれる）、全900文の21%も占めている。そして、「你」と「你们」が言語化されている短文は126文であり、全900文の14%を占め、この両者を合わせると、日常会話で最もよく使われる中国語短文900文の中に、「我」や「我们」あるいは「你」や「你们」のような言語主体が言語化されているものは316文もあり、全900文の35%も占めているということになる。一方、この『漢語900句』の日本語版『コミュニケーション中国語900』の日本語対訳文を見ると、「わたし」と「私たち」が言語化されている短文は33文で、全900文の3.6%しか占めておらず、「あなた」と「あなたたち」が言語化されている短文は10文で、全900文の1.1%しか占めていない。両方合わせても、わずか43文であり、全900文の4.7%しか占めていない。もちろん、ここの日本語は元の中国語の対訳なので、当然その原文に影響されている要素も顧慮に入れるべきだが、それでもなお非常に少なく、元の中国語では、「我」や「我们」あるいは「你」や「你们」が言語化されている316文に対して、訳された日本語のほうでは、それらが言語化されているのはたったの43文で、原文のそれと比べると、原文の約13.6%しか翻訳されていないということは、やはり注目すべき事実であろうと思う。

認知言語学的な立場から見ると、日常的な発話に際して、話し手には、認知的主体と言語的主体という二つの態度が認められる（池上嘉彦による）。認知的主体が発話のイマ・ココの場にある話し手自らを原点とし、場に密着したまま事態を感覚的に認知し、認知した事態をまるごと（＝コト的・非分析的に）体験通りに（＝身体的に）言語化する態度をとるのに対して、言語的主体は、発話に際して認知した事態や自らをイマ・ココの場から切り離して抽象化・対象化し、それを命題的に分析・再構成して脱身体的に言語化する態度をとる。この観点から見ると、もし日本語話者の場合は前者の傾向が顕著であると考えられるのであれば、中国語話者のほうは、どっちかという、少なくとも日本語話者よりは後者のほうに近いということが言えるのではないかと思う。

それから、このような話者的立場のほかにも、それぞれの言語には、その立場を実現させる文法的な構造も、大きな役割を果たしていると思われる。

たとえば、日本語には文法的な構造として、「お(ご)～します」というような構造があり、そのような文法構造あるいは「謙讓語」を使うことによって、その動作が話者（あるいは話者側）のものであることを示すことができる。しかし、一方中国語では、そのような構造がないために、いちいち話者の立場を示す方法として、話者が顔を出すのが基本的なパターンとなる。

中：我来介绍一下。

日：ご紹介します。

中：我送送你们。

日：ちょっとそこまでお送りします。

中：我妈妈向您问好！

日：母がよろしくと申していました。

それから、日本語には「～したい」のような、話者（あるいは話者側）にしか使えない助動詞もあり、そのような文の中でも、話者を特に言語化する必要がない。しかし、その意味と対応する中国語の「～想～」という表現は、特に話者（あるいは話者側）に限定する制限がないために、文の中で表現するときは、やはり話者を言語化して表現しなければならない。

中：我想喝咖啡。

日：コーヒーが飲みたいです。

中：我想当翻译。

日：通訳になりたいです。

さらに日本語の「好き・嫌い」に関する表現も、中国語と比べた場合、話者に限るような傾向が強い。

中：我喜欢打乒乓球。

日：卓球が好きです。

中：我喜欢看书和听音乐。

日：読書と音楽を聞くのが好きです。

一方、聞き手や聞き手側の動作に関しては、同じようにそれに対応する文法構造や「尊敬語」を使うことによって表現することができる。そのような手段がない中国語においては、やはり聞き手（あるいは聞き手側）を言語化する必要がある。

中：你是哪个大学毕业的？

日：どちらの大学を卒業されましたか。

中：你最近忙什么呢？

日：最近お忙しいですか。

中：你想吃什么？

日：何を召し上がりますか。

中：你们一定不会失望的。

日：きっと満足いただけると思います。

このような文法的な構造と表現的手段があるということが、日本語における話者や聞き手を言語化しなくてもいいということを保障されていると考えられる。しかし、さらに指摘しておきたいことは、日本語において、このような文法構造あるいは表現的手段が使わない場合でも、その動作や表現が、中国語と比べた場合、第一義的により話者に関する動作や表現になりやすいという傾向がある。

中：我饿了。

日：お腹がすきました。

中：我还没吃呢。

日：まだ食べていません。

中：我发烧了，还头疼。

日：熱があります。頭痛もします。

中：我太着急了。

日：ちょっと焦っていました。

それから、もうひとつ指摘しておきたいことは、各種類の文表現において、命令文に関しては、原理的に主語がない、つまり、動作主体を言語化しないというのが基本であるということは、すでに多くの研究に指摘されている。このことは、おそらく日本語に限らず、ある意味では汎言語的な現象とも考えられよう。つまり、中国語の表現を取り上げてみても、その現象が見られる。

中：站住！

日：止まれ。

中：坐下！

日：座れ。

つまり、このような命令表現においては、聞き手に面と向かっているということもあり、どの言語でも聞き手を言語化しないのが普通の表現である。もし、聞き手を言語化した場合、そこに何か特別な意味合いが含まれるのが考えられる。しかし、命令文の延長線上にあると考えられる要求の表現になるとどうだろう。これについては、どうも言語によって表現スタイルが必ずしも一致しないようである。

中：您请这边坐。

日：こちらにおかけください。

中：你再喝点儿啤酒。

日：もう少しビールを飲んでください。

中：你多吃点儿。

日：もっと召し上がれ。

中：请你们等一会儿行吗？

日：少々お待ちいただけますか。

日本語のほうは、命令文と同じように、聞き手を言語化されていない（もちろん、そこには前に触れたよ

うな言語的な手段も用いられている）が、しかし、中国語のほうはいずれも聞き手（あるいは聞き手側のもの）を言語化している。しかも、よく観察すると、活用形のない中国語においては、このような表現に聞き手を言語化するかどうかによって、そこには命令文か、要求文かの区別さえ見て取れるのである。

中：坐下！

日：座れ。（命令文）

中：你坐下。

日：座りなさい。（要求文）

この問題はおそらくただここに触れた人称代名詞の問題に限らず、さらにすべての主語、主題の問題にもつながっていくような大きくて深い問題であろう。

三、一語文の表現（形容詞を中心に）

言語は人間が物事を認識し、承認する手段である。文がその認識を反映するものである。そして、そもそも一語文はそもそも根本的な祖形であり、原点であると考えられる。

一般的に一語文といった場合、まず考えられるのは名詞一語文である。よく指摘されるように、名詞一語文の用法に関しては、中国語と日本語の間では、それほど大きな違いがないようだ。

では、ほかの品詞、例えば動詞や形容詞の方はどうだろうか。

まずは動詞の方を見てみよう。

a. 発見・驚嘆 〈日〉（ちっとも笑わない赤ちゃんが突然笑ったのを見て）おっ、笑う！（もちろん、「おっ、笑った」も可能）

〈中〉（同じ条件で）啊，笑了！

b. 希求 〈日〉（止まりそうもない電車に向かって）止まる、止まる。

〈中〉（同じ条件で）停、停。

c. 要求 〈日〉（泣きべそをかきそうな人を見て）笑う！（もちろん、「笑え」も可能）

〈中〉（同じ条件で）笑！

以上の用例が示しているように、中国語と日本語の間では、動詞による一語文の表現は、動詞の語尾変化による形態上の違いは多少あるものの、基本的にはやはり一致していると言える。考えてみれば、人間が物事を認識するときの二大要素を構成するのは、基本的に名詞と動詞でまかなっているのも世界の各言語の共通しているところであろう。つまり、言語によって、存在承認と存在希求を表す面においては、或いは物事を認識する面においては、どの言語も基本的には一致

していると考えられる。

一方、言語はまた人間の気持ちを表現する手段でもある。何かに触発されて起こった気持ちも言語の形として出てくる（もちろん、言語としての意味をなさない単なる声になる場合もある）。その点においては、各言語は果たして一致するのだろうか。

そのような気持ちが一番よく反映されている語類としては形容詞が挙げられる。それでは、日本語と中国語の形容詞による一語文の表現を見てみよう。

a. （下手な看護婦さんからいきなり注射を打たれて）

〈日〉いたっ！（あるいは「痛い！」）

〈中〉哎哟！

b. （薬缶がかなり熱いのを知らないで、触ってしまったとき）

〈日〉あつっ！（あるいは「熱い！」）

〈中〉哎哟！

以上の例が示しているように、日本語のほうでは、「痛い」とか「熱い」とか、あるいはその語幹による「いたっ」「あつっ」のような形容詞による表現で成り立っているのに対して、中国語のほうは、おそらく「哎哟！」のような、ただそのときの気持ちの直接的な表現になる感動詞で表現されている。

もちろん、中国語にも「疼（痛い）」や「烫（熱い）」の形容詞もあり、それによる一語文の表現もあるが、しかし、それらはどんな場合に使われるかと観察すれば、いずれも人に訴える場合にしか使えないようである。

例えば、「下手な看護婦さんからいきなり注射を打たれて」「疼！」と言った場合は、それは自分の「痛い」というとっさの気持ちを表すというより、むしろその看護婦に対して、今の注射はあまりにも下手ではないかと訴える表現になり、日本語に直すと「痛いよ！」に相当するような表現になる。それと似ているように、中国語で「烫！」と表現する場合は、例えば熱いのを知らないで、子供が薬缶に触れようとしたときに、それに触らないように注意するために発するのが普通であって、日本語に直すとやはり「熱いよ（触らないで）」という表現に近いのではないかと思う。

それから、例えば「危ない！」の一語文の表現を考えた場合、おそらく日本語としては、

a. 自分が危うく自動車に轢かれそうな場合

b. 他人が足を踏み外し、階段から転がり落ちて危ない目に会った場合

c. 他人が信号を無視して、道を渡ろうとする場合のいずれも表現できるのだが、しかし、中国語になる

と、おそらく「c 他人が信号を無視して、道を渡ろうとする場合」にしか表現できないと考えられる。それは、やはり「a 自分が危うく自動車に轢かれそうな場合」と「b 他人が足を踏み外し、階段から転がり落ちて危ない目に会った場合」は、いずれもそのような場面に触発されて、話者の気持ちの直接的な発出による表現であるのに対して、「c 他人が信号を無視して、道を渡ろうとする場合」は、他者に対する注意喚起の「訴え」の表現になるからではないかと考えられる。

もちろん、中国語と日本語の形容詞一語文には共通する面もないわけではない。

たとえば、

〈日〉寒い(=窓を閉めてください)

〈中〉(子供が)冷(=抱きしめてもらいたい)

のような例が示しているように、いずれも語用論的な使い方として、いわゆる「訴え」を通して、間接的に「要求」の表現として使われることがある。

しかも、中国語と日本語の形容詞特にその一語による表現に関しては、ここに挙げた感覚や評価にかかわる形容詞だけでなく、いわゆる属性を表す形容詞の使う範囲を見ても、ある程度の違いが見て取れる。

たとえば、ごく普通の属性形容詞の「大きい」と「大」を例にしてみれば、次のようないくつかの場面が考えられる。

状況 a. 洋服を買おうとして着てみると、一緒に来た人から、

〈日〉問：どうですか。答：大きい。

〈中〉問：怎么样? 答：大。

状況 b. 一人で靴を買おうとして履いてみたところ、店員さんに覗かれたとき、

〈日〉大きい。

〈中〉大。

状況 c. 本当に大きいもを見たとき、

〈日〉大きい!

〈中〉真大!

状況 d. 客が来ているのに、まだ平気でエレクトンを引いている娘に、

〈日〉大きい!

(=音が大きい、静かにしなさい)

〈中〉声儿太大!

上の例が示しているように、状況 a~状況 d まで、日本語はいずれも「大きい」と形容詞一語で表現できるのに対して、一方、中国語のほうは、状況 a と状況 b は「大」と形容詞一語で表現できるが、状況 c と状況 d になると、「大」一語では表現できなくなり、「真」のような副詞をつけたり、あるいは主述の整った短文

の形にしなければならない。特に、「真」などの副詞と関連してみた場合、日本語の形容詞一語による表現に対応した表現としては、中国語のほうは、よく「真、好」などの副詞をつけた表現になる。

〈日〉まぶしい! 〈中〉真晃眼!

〈日〉おいしい! 〈中〉真好吃!

〈日〉危ない! 〈中〉好危险!

更に、日本語に「情意形容詞」といわれる語類があり、その語類による表現と中国語の表現と比べると、もっと大きな違いが見られる。

(久しぶりに故郷へ帰ってきて)

〈日〉懐かしい!

〈中〉多么亲切、熟悉的故乡啊!

つまり、日本語のほうはまだ形容詞一語による表現で可能であるが、中国語のほうは、その気持ちを完全に表現するには、ひとつの文の形になるのである。

そもそも、人間がことばを使うことは、究極的なところは、現実世界にある事柄を承認する—「存在承認」か、或いは、非現実世界にある事柄を希求する—「存在希求」かのどちらかによるものだと考えられる。

ところが、人間が言語を発するには、もう一つのきっかけがあると考えられる。それは、何かの刺激を受けて、その刺激から引き起こされる感情を言語に託して表現することである。そのときの感情は、とっさに表現されるものもあれば、冷静に整理された表現として表されるものもある。この感情の表現になると、言語構造と性質により、違いが見られることがある。つまり、ある言語は感情表現或いは感情移入の表現として現れやすいのに対して、ある言語はそれについてあまりそのように直接ではないという特徴が見られる。そのような観点から見た場合、特に感情を載せやすい形容詞の表現と関連してみた場合、日本語のほうは感情移入においてしやすい言語であるといえ、中国語は、日本語と比較した場合、その点においてはむしろより客観的、より冷静的な言語だと言えるかもしれない。

以上、二つの事例を挙げたが、これと関連して、ほかに「感情・感覚・認識」、「ナル」表現、「テイル」と「夕」の表現、「移動と授受」、「方向性」の表現、「受身と恩恵」、「感動詞・応答・あいづち」、「省略」、「無助詞」、「ノ」の表現、「終助詞」、「指示語」、「配慮」表現などさまざまな問題がある。それらのものを如何に日本語教育の中で反映させていくのかということを考えれば、これからの日本語教育はまさに「道遠し(任重而道远)」であろう。

参考文献

- 池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』（講談社）
尾上圭介（2000）『文法と意味 I』（くろしお出版）
徐一平（1994）『日本語研究』（人民教育出版社）
中川正之（2005）『漢語からみえる世界と世間』（岩波書店）

じょ いっぺい／北京日本学研究センター センター長・教授